

あれこれと綴り合せて 累談義

沼波守

松村操氏の「実事譚」初編（明治十四年三月十八日刊）の最初に「累の実説」と題して載つて居る。左にその大意を記す。

下総国岡田郡羽生村（後の茨城県結城郡大花羽村羽生。昭和敗戦以来盛んに町村の併合が行はれて田や畑や山林の市が次ぎから次ぎにとできてゐるので、もしかすると水海道市に偏入されてゐるかも知れない。長塚節氏の「土」の岡田村の南方である。）の百姓に与右衛門といふ独者が居た。（堀越氏だといふからもとは相当の家柄であつたのであらう。同郡横曾根村（今の茨城県水海道市豊岡町）に住んでゐた寡婦で男児一人を持つてゐたのを妻とした。その児は容貌がひどく醜くかつたので、与右衛門が憎んで、常に此の醜児が居るなら妻も離縁しようと思つたといふから、その児は容貌が醜いばかりでなく性質もひどく拗けてゐたのであらう。妻は遂に我が身には替へ難いと絹川（今鬼怒川と書く。羽生も横曾根もその西岸の地である。）の辺の横堀へ投込んで殺して了つた。時に慶長十七年（西紀一六一二）四月十九日で、この児の名は助、時に六歳であつた。義夫の与右衛門は妻が助を殺した事を褒め悦び、睦しく暮してゐる

あれこれと綴り合せて累談義

うちに、翌年妻が女兒を生んだ。累と名づけた。この児が、殺した助と其儘の醜い顔で、生れると間もなく重い瘡痂にかかつて二眼と見られぬうへに性質もひどく拗けてゐた。世の人はかの助が重ねて生れてきたのであらうといつて「かさね」と異名した。

与右衛門は自分の実子なので憎いとも思はず養育してゐたが「かさね」が年頃になつた後、与右衛門夫婦は死んだので「かさね」は一人で暮して居た。其の頃六十六部廻国の修行者が此の村へ漂泊つてきて、農家へ雇はれて耕作の手助けなどをして居る者があつた。村人らはこの修行者を「かさね」の婿にしたらばと、媒酌する者があつた。修業者は「かさね」の醜さには辟易したが、七石ばかりの田畑があるのに引かされて遂に入婿となつて、先代の名を襲いで与右衛門と改めた。ところが「かさね」は顔が醜いばかりでなく、心も拗けて、白いといへば黒いといふ。直しといへば曲つてゐるといつて、一つとして与右衛門の心に逆らはない事はない。その上怖しく嫉妬深く、与右衛門がもし他の女と立ち話しでもしようものなら怒り猛つたので、流石の与右衛門も堪へかね、家を出ようとも思つ

だが、かの七石の田畑を捨てて去るのも残念、いっそ「かさね」を窮かに殺して家を押領してやらうと機会を狙ふやうになった。

承応二年（一六五三）八月十一日、与右衛門は妻の「かさね」をつれて絹川の向ふの畠へ豆を刈りに行った。終日刈取った豆を二ツの荷につくり、夕暮れ過ぎに、重い方の荷を「かさね」に背負はせ、軽い方の荷を与右衛門自身が負って帰路についた。途中で「かさね」が私に重い荷を背負はせるのは不人情だと苦情を云ひ出したのを、与右衛門はもう暫く我慢をしてくれ、絹川を渡ったらお前の荷も私が背負ってやるからと欺しながら、摺合の渡しを渡り、「実事譚」には、摺合に、「すりあひ」とルビが振ってあるが、あの辺では「すりあはせ」を訛って「すりあせ」と云ってゐる。この渡しの名は相馬の将門の不意を襲はうとする軍の先鋒と、将門の本営へ敵軍来襲を報せんとする将門方の者が、摺合ふばかりに渡ったから出た名だと、里人は語って呉れた。

この辺少々「実事譚」の原文を引く。

摺合の渡しをわたり絹川の西の岸をのぼり飯沼の弘経寺の辺を過て羽生村にうつらんとせしが、

とあるが、この道順は現在の地理から考へると少し変である。地理調査所発行の五万分の一の「水海道」の地図を見て頂くとすぐわかる事であるが、地図の右下、常総鉄道「なかつま」駅の西南の鬼怒川の渡しに摺合の渡しである。（地図には渡し場の記号はあるが名は出てゐない。そして私がここで用ゐてゐるのは陸地測量部と云つてゐた昭和七年版の地図であるから、地理調査所と改名されてからのとは少々は

異つてゐるかもしれない。その渡し場から一寸西に寺の記号のあるのが後にいふ「かさね」等の墓のある法蔵寺である。法蔵寺の殆んど真西に當つてゐるのが、地図にも名が記されてゐる弘経寺である。だから摺合の渡しのもっと下流、豊水橋よりは上流の小山戸の渡し（昭和十九年頃には渡船はなくなつてゐた。）を渡つて、飯沼の弘経寺の辺から羽生に行くといふのならわかるが、摺合の渡からでは道順が逆になるし、弘経寺は今では鬼怒川堤からは西へ一軒ばかりも隔つてゐるが、これは川の流れが変つたかもしれないからとみて、今いふ小山戸の渡がもとは摺合の渡しと呼ばれてゐたのだとすれば、この「実事譚」の文は解けるけれど、もし仮りにさうだとしても、与右衛門の家の畠が余りに南に離れ過ぎて居る。やはり今云ふ摺合の渡しを渡った東岸の辺にあつたと見るのが自然のやうに思はれる。かういふ理由でこの所の「実事譚」の文は誤つてゐると考へなければなるまい。以下また「実事譚」に拠つて大意を記しつづける。

弘経寺の辺を過ぎて羽生村に入らうとした所に、大きな横塚があるので、四辺に人なきを見まして、与右衛門は「かさね」を塚に衝落し、自分も塚に飛込み、助けるやうに見せ掛け、「かさね」を泥の中へ突込んで殺してしまつた。此所は嘗て助が母の爲めに沈められた所であつた。その時報恩寺村の清右衛門といふ者が、此所を通りかかつて樹蔭に隠れて与右衛門が「かさね」を殺すのを窺ひ見てゐたのを、与右衛門はすこしも知らなかつた。与右衛門は家に帰つて近所の人々には、「かさね」は誤つて水に溺れて死んだと披露し、死骸を、羽生村の法蔵寺に葬り、戒名を帰真理屋性貞信女、承

応二癸巳天八月十一日と鐫った石塔を立てた。事の実際を知つてゐる者もいくらあつたけれど「かさね」が親族は一人も無かつたので、事を荒だてる者もなく、その儘にすんでしまった。

与右衛門は悦んで「かさね」の家を押領して、気に入つた妻を迎へたが、幾人も幾人も子も無くて早く死んでしまった。最後に迎へた妻が一人の娘を生んだ。この娘を菊と名づけた。（この菊に「かさね」の死霊が憑依する事になる。「かさね」から導き出された「四谷怪談」にも菊と云ふ娘がある。四谷怪談の方の菊は、伊右衛門の後妻の産んだ子の中に菊といふ名の娘があるといふだけの事であるけれど、かさねの方の菊は事件の大立者である。菊といふ名は婦人の名として極めてありふれた名であるから、ただの偶然かもしれないが、幽霊話の横綱格「皿屋敷」のがお菊であるところに、何等かの関係をもつてゐるはしないであらうかと思はれてならない。）

お菊が寛文十一年（一六七二）十三才になつた年の八月半頃、お菊の母も死んだ。此の年の十二月頃に与右衛門は後妻の甥である金五郎といふ者を婿にとつてお菊にめあはせて家を継がせようとした。（前に与右衛門はかさね殺害の後数人妻を迎へたが、皆早く死んだとあるから、ただ後妻といつてもどれだか解らないけれど、お菊の母親の甥と解するのが自然であらう。）ところが、翌寛文十二年の正月からお菊が病氣になつた。廿三日には口から泡を吐き目を怒らし、父与右衛門を屹度睨んで「われは二十年前に絹川のほとりにて利主に殺されしかさねなり。最期の有りさまは報恩寺村の清右衛門も能く知れるその怨みを報いんために来れるなり。思ひ知れ

あれこれと綴り合せて累談義

よ。」ときさまさまに口走つて罵る。与右衛門は驚き怖れて、ただ怒るせ怒るせと云つてゐるばかり、金五郎はこれは恐ろしいと、実家へ逃げ帰つて寄附かない。

組合の百姓どもがこれを聞いて村長に告げた。そこで名主の三郎左衛門、年寄の庄右衛門等が相談して、医師や陰陽師などを招いて色々やってみたが、一向に効目はなくお菊の病氣は烈しくなるばかりであつた。その頃祐天僧正はまだ年二十六、同郡の弘経寺で学んでゐた時である。

此の時祐天は師の檀通上人が飯沼の弘経寺の住職をしてゐたので、祐天も同寺に居たのである。この弘経寺は十八檀林の一つで、天樹院夫人（豊臣秀頼の室）の墓もある浄土宗の名刹である。祐天寛文十二年（一六七二）二十六才とあるが、手近かな「大日本人名辞書」上巻（大正十五年三月二十日発行）に拠ると、祐天は寛永十四年（一六三七）の生れとあるから、寛文十二年には三十六歳の筈である。「実事譚」の誤りであらう。祐天が二十六歳であつたか、三十六歳であつたかは実はどっちでもいい。祐天が弘経寺に来てゐた時だといふ事が、「かさね」の話には必要な条件だったのである。

祐天が菊の噂を漏れ聞いて同侶二三人を連れて与右衛門の家へやつてきた。（この菊の病氣、祐天が出てゆくことについては早稲田大学出版部から出た「近世実録全書」第八卷（昭和三年十月四日発行）所収の「祐天上人」には色々奇怪な話が述べられて居る。）祐天は経を読み十念を授けなどして教化したが「かさね」の死霊は一向に立離れる様子もない。（これからが此の話の性根場だ

から「実事譚」の原文を掲げよう。

そのとき祐天僧正は家の外に立出でて空を仰ぎて声高らかに呼ばるるやう、十劫（劫、原文却に誤る）正覚の阿弥陀仏天眼をもてこれを見、天耳をもてこれを聞け。それ五劫思惟して超世の願を発して曰く、極重悪人、無他方便、唯称名字、必生我界と、今すでに応無くして誓願空し。靈山の世尊もまた聞け。六八の願を示し、自ら劬証して曰く、我見是利と、今既に験なし。是れ何の利をか見る。恒砂の諸仏舌相証明すとも、誠とするに足らず。若し我が言ふこと謬りあらば、金剛神をして我が首を打碎かしめよ。もしそれ称名竟に功験なからんには、我れ今より戒を破り、俗に還へり、外道を学びて仏法を滅ぼさん、とぞ罵しりける。
（原文句読はない。）

祐天の意気天を衝く、諸仏何ぞ感応あらざらんやである。果して、

祐天が再びお菊の臥てゐる枕辺で念仏數十遍すると物の化忽ち去つて、病ははじめて癒えた。祐天「かさね」の法名をうるはしく改めて贈り、阿弥陀仏の名号のかたはらに、理屋貞禪定尼、寛文十二年三月十日と書いて、お菊に与へた。これが後の世までも与右衛門が家に捧持してゐる懸字である。

かくお菊が病氣は本復したのに、同年四月十九日の朝からお菊がまた狂ひ出した。村人驚いて祐天の許に告げた。祐天再びお菊の家に来て、「かさね」が死霊は既に得脱して天上に生れた。しかるに今かくお菊を悩ますは何者だと詰ると、息の下に助だと云ふ。祐天村人呼んで聞くと、一人の老人が、昔、助が母親に絹川に沈めて

殺されたと聞き伝えてゐる。その後雨夜など絹川の辺で小童を見た者もある。「かさね」が殺されたのも同じ所だと云った。祐天は助に単到真入といふ法名を与へ十念を授けると、お菊の病名残りなく癒えた。

与右衛門も前非を悔いて仏門に入り、名を西入と改めて一心に念仏称名し延宝四年（一六七六）六月二十三日に往生を遂げた。お菊も尼となって祐天の弟子にしてくれと請うたが、祐天はそれでは父の家が絶えるからと、許さなかった。お菊は家を継ぎ子孫も出来て、享保十五年（一七三〇）五月三日七十二で死んだ。石塔に栄誉不生妙槃と鐫り、過去帳に栄誉妙槃比丘尼、享保十五戊天五月三日と記されてゐるのはお菊である。

といふのである。ここにいふ石塔とか過去帳とかは、「累の実説」の冒頭に

下総国岡田郡羽生村の羽生山法蔵寺に累が由来を記せし懸絵ありて、伝ふるところ実に詳らかなり。此の寺の門を入りて右の傍に百姓与右衛門が代々の石塔有り、その中に累が法名は帰真理屋性貞信女と鐫りて、傍らに承応二癸巳天八月十一日と鐫りそへ有り、又与右衛門の家には今も祐天僧正の序を記されたる過去帳等有り。

とあるから、石塔は法蔵寺（与右衛門の家の菩提寺）の、過去帳は与右衛門の家に伝へてゐる過去帳の事であらう。右の文を見ると、「実事譚」の編者松村操氏自ら法蔵寺や与右衛門の宅へ行かれたやうである。なほ「実事譚」の序の次に、「初編引用書」として挙げてある

中に、「相馬日記」、「祐天僧正実記」、「同外伝」、「近世奇跡考」、「新著聞集」の名が見えてゐるから、氏はこれらを参照して「累の実説」を書かれたのであらう。

右に見えてゐる「相馬日記」は高田与清の著、吉田東伍博士の「大日本地名辞書」にも所々引用されて居る。「祐天僧正実記」、「同外伝」は貸本屋で扱つてゐた所謂実録物と称する写本であらう。朝倉無声氏の貸本屋の写本の「軍記実録目録」に

祐天上人一代記 二五

祐天記 一六

祐天記後篇 一五

と見えてゐるのと同類の物であらう。

「近世奇跡考」と「新著聞集」とは、共に円本流行時代に出た「日本随筆大成」、第二期、第三巻に収録されてゐるから、最も手軽に読む事が出来る。「新著聞集」、十八巻、は著者不詳、寛延二年己巳（一七四九）刊行。「近世奇跡考」、五巻、は山東京伝の著、文化元年（一八〇四）五月、亀田鵬齋の序がある。二書ともに「実事譚」と大同小異で「実事譚」の方が祐天の祈が委しので、「実事譚」に拠つて記したが、その小異の個所を挙げながら、「実事譚」の記事を検討してみよう。

「新著聞集」では第十三、往生篇の第九話「絹川の二靈念仏生を転ず」といふのが「かさね」の話である。「近世奇跡考」では卷之二、第七話「羽生村累の古跡」と題したのがそれである。「奇跡考」は「かさね」の事は

「死靈解脱物語」元禄三年、寛延二年等にしるして人板本「新著聞集」寛延二年等にしるして人板本みなしれる事なれば、くはしくしるすにおよばず。

とあるから、「新著聞集」と同様なことは当然である。以下「実事譚」「は実事」、「新著聞集」は「新著」、「近世奇跡考」は「奇跡」の略号を用ゐる事にする。

「実事」では「かさね」が殺されたのは、承応二年（一六五三）八月十一日となつてゐるが、「新著」、「奇跡」共に、正保四年（一六四七）八月十一日となつてゐる。「実事」によれば、「かさね」が生まれたのは、慶長十七年（一六一二）助が六歳（「新著」は五六歳、「奇跡」は三歳）で母親に殺された翌年だと云ふのだから、承応二年ならば四十一歳、正保四年ならば三十五歳（この文中の年齢の数へ方は敗戦前の所謂よばりである。）の筈である。「かさね」が西入与右衛門を夫としたのは何歳の時であつたかは、「実事」、「新著」、「奇跡」ともに記載はないが、谷口梨花氏著（趣味芝居と地蹟）には記されてゐる。此の書は昭和三年五月廿日、歌舞伎出版部から発行された物で、私の記憶では、東京の歌舞伎座で近く上演された物の史実を实地を調査して、「演芸面報」に毎月一題宛連載されてゐた物を、後に一括して単行本となつたものである。著者谷口氏は多分鉄道省の囑託で、旅行の便宜があつたので諸所を实地踏査されたのである。それ故に趣味の旅と角書をしたり、当時の鉄道次官八田嘉明氏の題字があつたり、鉄道省運輸局長寛正太郎の序文があつたりするのである。さて「かさね」はその本の第二話で「累の遺跡と『色彩間苺豆』」と題してある。

谷口氏は「常総鉄道」の磯野氏、「中妻」なかづま駅長の中座氏が同行して、

多年「かさね」の事蹟を調査した落合愕堂氏の家を探ねたが、愕堂氏は先年物故してゐたので、其の遺著「羽生奇聞かさね譚の真相」を借覧したあるから、これに拠られたのであらう。

丁度其頃中国辺のもので谷五郎と云ふ六部が熱病に罹つて「郷送り」となつてこの村の弥陀堂（阿弥陀堂の阿を落したのか）に起臥して居たのを、かさねが哀と思つて親切に看護したのが縁の端、谷五郎も情に絆されて遂に夫婦となつて与右衛門を名乗ることとなつた、かさね時に三十三だと云ひます。

とある。三十三だつたとすれば、殺されたのが正保四年とすれば足掛け三ヶ年、承応二年では足掛け九ヶ年となる。右の阿弥陀堂は私が行った時にも、「かさね」の家であつたと云ふ農家から近い所の建物も何もない狭い平らな地をその趾だと云ひ、家が近いので「かさね」に食事其他の世話をさせたのだと村人が話して呉れた。右の文のやうに「かさね」が孤独の病人を哀れんで自ら進んで親切に看護したとすれば、「かさね」は諸書に伝へるやうな拗けた性質の女でもないやうで、西入与右衛門を熱愛したが、西入与右衛門が冷淡なので猛り狂つたのだと考へられない事もない。もしさうだとすれば、貸本屋本「祐天上人」に

其時同村の者共一兩輩、累が最期の有様を窺に見て知ると雖も、姿容の醜きのみならず。心さへ人に疎まるる程の者故、実にも理り然こそと、終に与右衛門を咎る者も無かりけり。

とあるのは、祐天上人の靈験を高調しようとするの余りに、「かさね」を實際以上の悪女と仕立てあげたものと云はなければなるまい。そ

して殺した与右衛門が地獄に墮ちるのなら兎に角、殺された「かさね」が墮地獄の苦を受けるといふのは理窟に合はない。「かさね」を地獄に墮す為に、「かさね」を大悪女に仕立てあげたのだと考へられ、「かさね」に対して大いに同情の念に堪へない。

「かさね」の容姿について、「祐天上人」には

色黒く片眼齷り鼻はひしげ、口の幅大きく、都て顔の内に瘡の跡ひきつり、手も屈り片足短く、世に類なき恐しき婆（これは菊が地獄であつた「かさね」を語る言葉である。）

「芝居と地蹟」にも

色が黒い上に痘痕、片眼に獅子鼻、刺に右の頬に痣があり、夫で跛

と想像し得られる限りの醜女としてゐる。これは其の儘助の容姿である筈である。これも死霊となつた時に人々を怖れさせようとしての用意だと思はれる。

「かさね」が夫を持った時は三十三歳であつたとして、夫与右衛門はその時何歳であつたのであらう。これに対しては所見がない。西入となつた与右衛門は延宝四年（一六七六）六月二十三日に死んだとは「実事」ばかりでなく、「新著」も「奇跡」も同様であるが年齢の記載がない。お菊が七十二歳で死んだのを「奇跡」には長寿と記して居るから、西入の死んだのを仮りに六十歳であつたとすれば（これは長寿とも何とも記されてゐないから、人生五十といふのをあと十年長生させてみただけの事で、何の根拠もある訳ではない）、元和三年（一六一七）生れで、「かさね」より四歳の年下、「かさね」を殺したのが

正保四年ならば、「かさね」三十五歳、与右衛門三十一歳、承応二年だとすれば、「かさね」四十一歳、与右衛門三十七歳。とにかく年上の醜い女房の嫉妬深いのに悩んでと云ふ事になる。

「かさね」の歿年が正保四年だといふ事は、「新著」は何に拠ったか知らないが、「奇跡」には、「法蔵寺過去帳の写」として

理屋松貞信女

俗名るい、名香齋妙林

行年三十五、正保四丁亥年八月十一日、初法

単到真入童子

俗名、助、三歳、寛文十二壬子四月十九日、此年号は助、得脱の年なり、実は慶長十七壬子四月十九日死。

栄着不生妙繁信女

俗名さく、行年七十二、享保十五庚戌五月三日。

と出てるから、信じてよささうだが、「実事」に

かさねは誤って水に溺れて死したりと披露して、死骸をば法蔵寺に葬りて戒名を帰真理屋性貞信女、承応二癸巳天八月十一日と鐫りたる石塔を立てたりとぞ。

とあるのは、この戒名は祐天が与へたといふのだから、此の時ならば「香齋妙林」となければならぬ。しかし歿年の年号は一寸疑ひ憎いやうにも思はれる。「芝居と地蹟」にも

寺門を入れて右に石の卒塔の並んで居るのが与右衛門一家の墓で、理屋松貞信女承応二癸巳天八月十一日とあるのが累女、其右に単到真入童子寛文十二癸子天四月十九日とあるのが助童で、この二つは観音像を刻んであります。助童は慶長十七年に死んだが寛文十二とあるのは祐天上人の念力によって得脱した月日ださうです。菊女の墓は累の左に栄着不生妙繁法女とあります。

とある。ところが、「かさね」の法名が性貞、照貞これには松貞とい

あれこれと綴り合せて累談議

いろ異ってゐる。助得脱の年といふ寛文十二年は「奇跡」にあるやうに壬子の年であるのに、これに癸子とあるのは大きな誤りである。私が法蔵寺へいった時墓を明瞭に見てこなかったのが残念であるが、思ふにこれは正保、承応、音が似てゐるところからきた誤りで、疑つてみるならば石塔は、正保四年が承応四年と誤られて、「かさね」の怪談が有名になってから立てられたものではあるまいか。菊の石塔がありながら、西入与右衛門の石塔の事が何とも記されてゐないのも不審である。

助が殺されたといふ慶長十七年も壬子の年、得脱したといふ寛文十二年も壬子の年に当ってゐるのも不思議である。殺された時も四月十九日、祐天の法力によって得脱したのも四月十九日といふのは、祐天の力によって得脱しようと、自分が殺された日に菊に憑いたのであらうが、それならば「祐天上人」にあるやうに、祐天に何者と問はれた時何故に直ちに助と明瞭に答へなかつたのであらう。小児だといっても菊に憑くほどの者が余りに没分曉漢すぎる。そればかりではない。自分の母親に殺されたのならすぐ母親に、「芝居と地蹟」にあるやうに義夫与右衛門が妻（助の実母）と謀って、鬼怒川べりの七塚堀に助をつれて行って、鎌で助の咽喉を刺り土橋の下流に投込んで殺したといふのなら、何故に義夫与右衛門や母親に怨を述べて悩まさなかつたのであらう。二人を安穩にしておいて、数十年もたつてから、助とは何の血縁もない西入与右衛門の後妻の子に憑いて悩ませたのであらう。尤「かさね」は助の生れ代りだから、自分の醜い姿其儘の「かさね」となつて両親に苦痛を与へたのかもしれないが、直接に怨のある両親を

無事に死なせたのは、何と云っても手緩いと云はねばなるまい。これは祐天が弘経寺に來ないと話にならないから待たせてあったとしか思はれない。

助は小童であったから仕方が無いとしても「かさね」自身にしても私には合点がゆかない。「奇跡」に、

与右衛門、後妻をむかふる事五人、みなかさねが為にとり殺さる。六人めの妻（「芝居と地蹟」）には、「五人目の貝塚村（羽生の北に隣る地）のおきょうと云ふのが妊娠して生れたのが菊とて嬌姿花を欺く娘」と大分委しい、娘きくをうむ。きく十三の年、

寛文十一年亥八月中旬、その母も又とり殺さる。

とある。菊は寛文十一年（一六七二）に十三歳だとすれば万治二年（一六五九）の誕生といふ事になる。その母が与右衛門に嫁したのがその前年の万治元年（一六五八）だとすると、「かさね」が殺された正保四年から足掛け十二年間に五人の妻が死んだ事になる。「かさね」殺が承応二年だとすれば、足掛け六年間に五人の妻が死んだ事になる。如何に田舎の事だといへ、いや田舎だからこそ近隣も煩いから、妻が死んだ、すぐ次の妻を迎へるといふ訳にもゆくまいし、そんなに來ては直ぐ死ぬやうでは、二三人も死んだらもう來る人はあるまい。かう云った点を考へてみても、「かさね」殺しは正保四年とする方が納得がいく。「祐天上人」には与右衛門の田畑は「かさね」の怨念の為にずっと不作であったとあるが、何故にそんな迂遠な事をしてゐたのであらう。自分が殺されてから、正保四年とすれば足掛け二十六年の間、承応二年だとしても足掛け二十年の間、地獄の苦しみをしてか

らやっす菊に取憑くなど随分気の長い話だ。何故手取り早く与右衛門を取殺して了はないのだ。罪もない菊を悩ませて、最も怨むべき筈の西入与右衛門を生かせておいて、最後に極楽往生させるとは、「かさね」の心が納得出来ない。やっぱり心の底では与右衛門を熱愛してゐたので、地獄へ連れて來るのに忍びなかつたのであらうか。「かさね」が殺されてからも、後妻に來た女が次ぎから次ぎと死んでいっても、それにも拘らず六人まで來る女があつたといふのは、与右衛門が芝居でやるやうな好男子であつたからでもあらうか。これも祐天上人の十念を授かる為めに待つて居たのだとしか考へられない。

要するに「かさね」の怪談は、祐天上人の法力の靈驗を示す為に出來上つてゐる話だといふ事を私は云ひたいのである。まだ「死靈解脱物語」の事、「近世奇跡考」に出て居る「絹川累ヶ淵凶」に書かれてゐる説明についての不審、「かさね」から「四谷怪談」のお岩様が導き出されてゆく経緯など書きたい事はいろいろあるが、割当てられた頁数を越えるので、今回は割愛して後日を期さうと思ふ。

（本学教授——国文学）